

目から大きな鱗が

「樹木たちの知られざる生活 森林管理官が聴いた森の声」
(ペーター・ヴォールレーベン著 長谷川 圭 訳) を読んで

朴 順子

木のコミュニケーションの団結力

まさに目からうろこが落ちるほどの衝撃を受けた一冊だった。あまりにも知らないことが多すぎて、頭の中がラッシュアワー状態。メインディッシュを自負していたら端っこのパセリにもなれなかった気分。

木々や草花は暮らしの中で四季折々、多くの癒しをもたらしてくれる。しかし長らくその名前すらほとんど知らないまま過ごしてきて、その声に耳を傾けたこともなかった。何百年、何千年と人類より先に命を育んできた樹木と、ほんの一瞬を共にする人間にその謎を解き明かすことは難しい。だが、多くのヒントをこの本から得られた。

木々のコミュニケーションの団結力はとても強いという。森林の樹木は地中のネットワークを通して栄養を分け合う。病気で弱っている仲間には水や栄養を分け与え、その回復をサポートする。ブナの木は公平に同じ量の光合成を行うそう。なぜなら、協力することで生きやすくなるから。一本一本が自分のことばかり考えていたら多くの木が大木になる前に朽ちていくからだという。仲間から離れて孤独になっ



た木は長く生きられない。

文中に「“社会の真の価値は、その中の最も弱いメンバーをいかに守るかによって決まる”という職人たちが好んで口にする言葉は、樹木たちが思いついたのかもしれない。森の木々はそのことを理解し、無条件にお互いを助け合っている」とある。コロナ禍に生きる身には深く深くしみいる言葉だ。

木の教育方針

木の教育方針にも驚くばかりだ。若木はどんどん生長したがるのに、母親がそれを許さない。その手段は光を遮ることにあるそうだ。なぜだろう。若いころにゆっくりと成長するのは長生きするために必要な条件だという。そのおかげで内部の細胞がとても細かく、空気を含まないので柔軟性が高く、感染も予防できるからだ。そのかわりに子どもたちはずっと我慢をしいられる。80歳を超えるブナの若木たちは人間の年齢ではおよそ40歳、独立するには200年ほどかかるそうだ。

文中、「だが子供たちは一方的に我慢を強いられているわけではない。根を通じて母親とつながり糖分をはじめとした栄養をあたえられるからだ。人間の母親が赤ん坊に母乳を与えるのと同じことが行われている。……でもいつか親の木が病気になる。あるいは寿命が尽きる時が必ずやってくる。……一方、生き残った子どもたちは、親が居なくなってできた隙間から希望の光が差し込んでくる。ようやく好きなだけ光合成をするチャンス

が来たのだ。しかも息を引き取る瞬間、母親が自分に残された最後の力を、根を通じて子どもたちに託す。環境の変化にうまく対応してくれ、と。」

ゆっくりとゆったりと生まれた命はきっと強いだろう。まるで感動のドラマのワンシーンを見ているようだ。

「ゆずりは」

河井醉茗の詩「ゆずりは」が頭に浮かんだ。

子供たちよ。
これは譲り葉の木です。
この譲り葉は
新しい葉が出来ると
入り代わってふるい葉が落ちてしまうのです。

こんなに厚い葉
こんなに大きい葉でも
新しい葉が出来ると無造作に落ちる
新しい葉にいのちを譲って――。

子供たちよ
お前たちは何を欲しがらないでも
凡てのものがお前たちに譲られるのです
太陽の廻るかぎり
譲られるものは絶えません。

輝ける大都会も
そっくりお前たちが譲り受けるのです。
読みきれないほどの書物も
みんなお前たちの手に受取るのです。
幸福なる子供たちよ
お前たちの手はまだ小さいけれど――。

世のお父さん、お母さんたちは
何一つ持ってゆかない。
みんなお前たちに譲ってゆくために
いのちあるもの、よいもの、美しいものを、
一生懸命に造っています。

今、お前たちは気が付かないけれど
ひとりでのいのちは延びる。

鳥のようにうたい、花のように笑っている間に
気が付いてきます。

そしたら子供たちよ。
もう一度譲り葉の木の下に立って
譲り葉を見る時が来るでしょう。

フリーランスの営林者として

生態系のサイクルを支えているのは、自然界のありとあらゆるものたちだ。太陽、雨、風、土、虫、菌類、動物・・・

人間の都合ばかりを優先した林業に疑問を感じ、安定を捨ててフリーランスの営林者になった著者は、森の中で繰り広げられるたくさんのドラマと感動の物語を、大きな愛を持って伝えてくれた。

著者は語る。「人間は利用するために、生きている動植物を殺す。その事実を美化すべきではない。そうした行いが非難されるべきかどうかは、また別の問題だ。私たち自身が自然の一部であり、ほかの生き物の命を利用しないと命を維持できないようにできているのだ。どの生き物も同じ運命を共有している。問うべきは、人間が必要以上に森林生態系を自分のために利用していいのか、ということだろう。家畜と同じで、樹木も生態を尊重して育てた場合にだけ、その木材の利用は正当化される。要するに、樹木には社会的な生活を営み、健全な土壌と気候の中で育ち、自分たちの知恵と知識を次の世代に譲り渡す権利があるのだ。」

森の声を聴いてみたい

経済効果を優先するあまり、大切なものが見えなくなり、失った痛みだけを次世代に残すことになりはしないか。心して自然界の声に耳を傾けてみよう。まずは、人の影響をほとんど受けていないという白神山地のブナの天然林を訪れて心静かに森の声を聴いてみたい。